

女ひとりのアラスカ

岸 栄



熊の出るアラスカの山に、たった一人で
出かけた痛快で優雅なお嬢さん冒険記！
氷河と野獣の山に挑むスリル満点の記録

350円

文藝春秋刊

女ひとりのアラスカ

岸 栄

文藝春秋刊

女ひとりのアラスカ

昭和四十四年九月一日 第一刷

定価三百五十円

著者 岸 きし 栄 さかえ

発行者 檜原雅春

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三
郵便番号一〇二

印刷所 凸版印刷
製本所 矢嶋製本

・万一乱丁落丁の場合はお取替えいたします

目 次

女ひとりのアラスカ ■ 目次

アラスカと山と私と

7

鉄砲玉をアメ玉に替えるには

20

餌つきカタツムリの遠征計画

27

ある休日にビザはおりる

36

「ユー　アー　ラッキー」

48

「ニイタカヤマ」と「ドラムサン」

59

小型飛行機は葉巻とともに

72

丸い虹の世界を越えて

81

秘境「熊の巣飛行場」

91

湖と草原の国で

99

トナカイは雄がいい

109

ドラムの聞えてくる氷河

118

たたくなドラムを

128

ドラムとその周辺

137

草原の盟主との対面

144

再び「熊の巣飛行場」に

150

ドラムの動物たち

158

風と夜中の太陽

165

ドラムに静かな朝が来た

174

「ユア ナイス デイ」

181

あとがき

192

写真撮影
著者
カット
著者

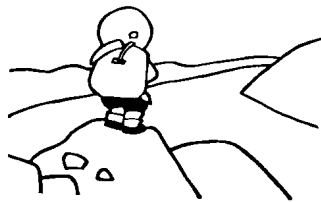
女ひとりのアラスカ

——北緯六十二度の山——

アラスカと山と私と

厳密に言えばその山は、北緯六十二度よりも北に寄っていた。しかしあまりにも明るくのびやかなアラスカの大自然と、そこで接した生あるもののおおらかさを思いかえた時、その山の所在にこまかい端数をつけることなどは、かえってそぐわないことだという気持ちがわいてしまったのだった。

一九六七年七月、アジア大陸の東につらなる島国の多くの山がつゆ空から抜けようとしている頃、私が初めて訪れた北米大陸北西部の北緯六十二度の山は、つゆ空をかぶる山の存在など忘れそうな青空を背に浮かんでいた。千古の雪をいただく山頂から四方に張り出した氷河を従えたその山は、たしかに私の求めていた山に違いなかった。



山の名はマウント・ドラム。洋太鼓のドラムと同じスベルを持ちながら、その山容はいずれから見ても太鼓に似た姿とは思えそうもなく、広範囲の地図には一万六千二フィートの標高が記されながら、最も精密な地図には別の数字しか見出せないというまことに不思議な山であった。

「この地図上一本の道路も小路もなし」と余白に示された一枚の地図の山城でただ一人、氷河のほとりに咲く色とりどりの花や、ここを楽園とかけ回る鹿やトナカイの群れをながめながら、数日を過ぎた私が麓の町に立ち寄った時、一人の男が話しかけてきた。

「山に何を求めに行ったのか」

「どうしてあの山を選んだのか」

と。

私はトーマス・ハーディの著書「ネバールの高地にて」の一節を思い出していた。

「ネバールの人のほとんどがそうであったように、グンサの人々はヨーロッパ人がなぜ計画された日時にしたがって山に登らねばならないかを理解できなかった。多くのヨーロッパ人さえ彼らの仲間がなぜ山に登りたがるかを理解できないのである。」（神原達・牧野登訳。朋文堂版による）

してみれば、この土地の人が私の山行さんこうに対して問いを投げかけることも、ごく自然な現象に過ぎないだろう。まして日本の四倍の広さの土地に、私の住んでいる東京八王子市といくらも違わない人口しかないというアラスカであれば、わざわざ入のいない山中に入り込む者の気持など、

どうても理解出来ない人も多いに違いない。

その時、別の一人が言った。

「今まで誰も一人で入ったことのない山に、女性が一人で入って行ったのですもの、勇敢だつて」

世に知られざる山の記録は得がたかった。地元の男性くらいは単独でも入っていたらうと思つていたのだが。

「誰も」と言うからには、もちろん男性も含めてのことだろう。しかし私が入山した時からすでに記事のをせていたという地元の新報を見た時、私が女性であった事も彼等の関心を高めたのだと思わざるをえなかった。そこには「七十八ポンドの女性五十八ポンドの荷で山に入る」と書かれていたのである。

この体重に対する荷物の重さの割合は、長い合宿や訓練山行であれば決して珍しいものではない。私自身にしても最初の冬山合宿に出発する夜、上野駅での荷は、これよりもはるかに重いキスリングにスキーとビッケルが加わっていた。しかしもちろんそれはニュースにはならなかった。アンカレッジを立つ時の私の荷が体重の割に重かったからとて、早速取り扱ってしまったとは、さすがはレディーファーストの国の新聞であつた。

たしかに「大袈裟にならないように海外遠征を行なってみよう」という私の一つの願いのため

には、女性が重荷を持つことなど珍しくない国を選ぶべきだったかもしれない。すでにその体内に新しい生命を宿しながらも、外人遠征隊の荷役を続けたという女性ポーターのいた国などなら、容易に報道の対象にはならなかったろう。

しかし、まず一週間という時間的な制約のために、そこは地球上の他のいくつかの山域とともに私の視野から遠ざかっていった。そして残りの地域から、経済的にまかなえ、しかも日本の山では得られない氷河をかかえた山域を求めた時、そこに大きく浮かんできたのがアラスカの山であった。

「そうですか……。家の人は知っていたのですか。家族にも行先を話さずに行ったと聞いたものですから」

帰国後、自宅に見えた某紙の記者は、事実を私から聞くといささかがっかりした様子であった。「こんなせまい家ですから、だまっけても仕度をしていればすぐわかってしまいます」

家の広さについては主人側としての謙遜も含めて言ったつもりだった。住宅難のうちに三人家族で2DKよりは広い一戸建てに住まって、そうそうせまいなど言っても申し訳ないだろう。しかし彼はすぐさま、

「そうでしょうね」

とあっけなく同意してくれて、私をがっかりさせたものだった。

アラスカ行を家族に打ち明けて出かけた私にも、家族にことわりなしに事をおこし始めた記録もないわけではない。それは一九六一年の春、それまでつづけて来た縦走を中心とした山行にあきたらなくなった私が、今年こそはより高度な山行にふみ出そうと決意した時であった。

女だてらに雪山や岩登りを目的とした山岳会に入りたいなどと言っても、家族は簡単には許してくれないだろう。しかしだからといって、たたかずにトビラが開かれるのを待っていてよいものだろうか。ある日、私は思いきって新人会員を募集している山岳会の広告をたよりに、一通の葉書を出してみた。葉書は往復葉書だった。

数日後、返信は無事に我が家に送られてきた。もっともこの無事という言葉は、あくまでも葉書が郵政省の管轄下におかれている間に対しての言い方に過ぎなかったのである。宛名の「行」のわきに様の字が書きそえられ、裏面には説明会場を示した地図などが記されていた、当家とは何の縁もなさそうな発信人からの一枚の葉書は、我が家の郵便受から取り出されるや、どうして無事に机の上に載せておかれるなどの扱いは受けなかったのであった。

「こんな所に入ってどうする気だ。どうせ訓練がきびしくてついて行けやしないぞ」

「けがでもないうちにあきらめなさい」

日が暮れてから帰宅した私を待ちかまえていたこのような家族の言葉を、私自身はまず「果せるかな」という気持で受けとめたが、葉書はさぞやおどろいたことだろう。

その夜私がどのようにして家族を納得させたか記憶は定かではない。わかっているのはとにかく入会することだけは許してくれた事である。恐らく私は「同じにハイキングをするにしても、高度の技術を身につけていた方が安全なわけだ」などと説明してひとまず納得させたのだろう。

最初の山行は初夏の鷹取山での登攀訓練であり、その日のリーダーは、当時に籍を置いておられた遠藤登さんであった。その後も指導者には恵まれながら、どうしてこの方の名前だけ出してしまったかと言えば、その時私は最初の訓練山行で殺されそうになったら、岩登りも雪山もあきらめようと覚悟をしていたため、その意味でこの方は、私のその後の運命を決定づけた特筆すべき人となったからである。

帰宅後私はタンスから腰ひもを引っ張り出して、習ったザイルの結び方をくり返していた。次にひかえた山行のために。

夏の合宿が終ったあと、気がついてみると一緒に入った新人の女性は姿を消し、残るは私一人となっていた。「石の上にも三年、と言うなら岩の上もその位だろうか」と私は思った。岩の上は三年を越えた。

やがて私は考えた。私があのかに入るのをひきとめようとした家族の心には、こういう所で刺激を受けていたらそのうちには海外の山にあこがれ出すに違いない、という予想が秘められていたのだろうと。

チャンバラもののマンガ本を読みふけたあげく、

「サカエ、イマニムシャシユギョウ（武者修業のこと）ニイクノ」

と無邪気に将来の抱負を語った幼い日、

「女の子なら花嫁修業よ」

とやさしくたしなめてくれた親の気持が今も変わらないものであるならば、いまさらこんな目的で他国修業に出たいなどと言ひ出されたくはなかったのであろう。

しかしその予想は的中した。私が行こうという「アラスカ」が、レストランでも喫茶店でもないらしいと思わざるを得ない日は刻々と近づいたのであった。

私がこの世にアラスカという所があることを初めて知ったのは、満五歳の頃だと思う。当時幼児向きの本として出ており、幼稚園でも家庭でも見かけた、キンダーブックという大きな絵本の「イヌノオハナシ」とかいいう一冊に、アラスカのそり犬の話が出ていたからである。

なぜあのページが心に残っていたのだろうか。ページいっぱい描かれた挿し絵が、空色と白と茶色とグレイでいろどられ、他のページのいかにも子供向きの絵らしいものとは異なった地味なものであった事が、かえって印象を強めたのだろうか。それとも、そのページの下の方に詩のようにのせられていたカタカナの群れのためだろうか。

「アラスカノナ

ノームトイウマチデ（ニ？）ナ」

このような書き出しで始まったその文は、たしかキシベ エンチョウ（東京・世田谷の岸边幼稚園の方）の書かれたものだと言憶している。

この子供に語りかけるような形式で続けられた数十行の文から、私はアラスカのノームでは、やったジフテリアという恐ろしい病氣からたくさんの幼い命を救うために、吹雪の中の長い道のりを走りつづけ、薬（ジフテリアの血清）を届けたというそり犬の話を読みとったのだった。

幼い心に残ったアラスカのイメージは「とても寒くて怖いような所」であった。

その後、私はもっと多くの活字のつまった本から、この話は一九二五年一月におこったノームのジフテリア流行の時の話であることを教えられ、私が生まれるちょうど十年前の出来事であったことを知った。その時代のアラスカでは、冬期にノームまで血清をとどける手段としては当然犬ぞりの使用が考えられたものの、すでに航空機を利用すべきかいなかという話も出されていたという。

当時アンカレッジに二台しかなかった複葉機は夏だけ使用され、あとは解体して格納庫にしまひ込まれているという状態であった。しかしこの緊急事態がおこった時、飛行機がすぐ組立てられるものなら自分が飛んでみるといふパイロットも現れたそうである。